

近所に、小さくかわいい本屋さんができた。挨拶がてら家人と行ってみた。ワンスペースに、女性店主のセンスが光る本が並んでいる。どんな本があるのだろうと眺めていると、一人の名前が目にとまった。「志村ふくみ」さんである。本のタイトルは、『一色一生』だった。志村さんは、染織家である。以前、中学校の国語の教科書に載っていた大岡信さんの『言葉の力』に出てくる方なので知ってはいた。

『言葉の力』の文章が好きである。いや好きになることができた。そのためか、志村さんのことは、ずっと頭にあった。文章を書く方であるらしいことも知っていた。だが、まだ読んではいなかった。思いがけず、エッセイスト志村ふくみさんの作品が、目の前に現われた。これは、買うしかあるまい。そう思ったが、この日はとどまった。もう一度、この書店に来る口実が欲しかったのかもしれない。

思い出したかのように、久しぶりに、大岡信さんの『言葉の力』を読んでみた。やっぱりいい。読むたびに味わいが変わってくる文章である。すると、『一色一生』が読みたくなってきた。あのかわいい本屋さんの書棚にポツンと置いてある文庫本が、自分呼んでいるような気がしてきた。待っていているのではないか。

数日後、歩いて数秒もかからないご近所さんにまた出かけた。幸いにも、『一色一生』はまだあった。ちゃんと待っていてくれた。事の次第を女性店主に説明し、購入する運びとなった。裏表紙には、こう書いてある。

染織家志村ふくみは、数十年、さまざまな植物の花、実、葉、幹、根を染めてきた。それらの植物から染まる色は、単なる色ではなく、色の背後にある植物の生命が、色をとおして映し出されているのではないか。それは、人と言葉と表現行為と、根本的に共通する。芸術と人生と自然の原点に佇んで思いをめぐらす深い思索とわがいのちの焔を、詩的に細やかに語るエッセイ集。

桜も言葉も同じである。言葉の一語一語は、桜の花びら一枚一枚と同じだろう。桜は、全身でその花びらの色を生み出している。大岡信さんは『言葉の力』の中で言っている。

言葉は、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまう。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。

まもなく、今年も桜の時期を迎える。桜の花びら一枚一枚の色は、桜の木全体で生み出されるものである。そう思うと、桜の見方が変わってくる。ささやかな言葉、一語一語も、その人全体を背負っていると思うと、受け止め方が違ってくる。この春は、桜とともに、言葉というものについて改めて考えてみたい。そんな春にしたい。